『教行信証』学習会４回目レジメ　　２０２０年7月３１日

**学習形態　　総論的に講義。のち各論的座談。**
**テーマ　　『教行信証』とは何か。**

**―　『教行信証』撰述の意図　―**

『行巻』について

課題 11「行」の概念について、

○　『教行信証』における行の概念と、その他（「聖道の諸教」）の行の概念との相違。
○　初めに「大行とは称名なり」と定義し、その後「行は海なり」という空間的表現に展開している。（称名は業、業は念仏、念仏は正念。と転釈している。）
○　英文［鈴木大拙訳］による比較。（別紙）
○　期限を切った限定的な修行の義ではなく、一生涯を通じて行っていく義。

参考　「後序」の文
「聖道の諸教は、行証久しく廃れ、浄土の真宗は、証道今盛りなり」における
行証と証道の比較の検討。

小結　「行」と「証」とが連結しているのが、本来の関係。しかるに、『教行信証』の「行」は一生涯を示しているので、「行」と「証」の連結にはならない。されば、この「行」をどのように理解されるべきか。
　それについて、ヒントになるのが、「証道」である。つまり生涯を道とする、ということ。即ちその「道」が「行」を意味してくる。そうであれば、「証」はいつ実現するのか。それを念頭に置きながら進んでいくべきである。（それについては『正信念仏偈』が重要な意味付けになってくる。）

課題 12「大行とは無碍光如来の名を称する」というテーゼを掲げているが、「名を称する」ということが、（従来の）行になりうるか。あるいは「無碍光如来の名」というところにその意味があるのか。それとも、称名が行になりうる、新たな「行」の概念が示されているのか。［課題９とリンクして考える］
○『教巻』においては「念佛」、とりわけ「佛佛相念」の意味が明らかにされたが、その念佛と称名の意味が同一であるのか、類似であるのか、相違であるのか？
　そうなると、教と証の連結に対して、佛佛相念の教と種々の身を現じる証の連結が見て取れる。

○「行」における、従因向果と従果向因の考察。
　従因向果・・・通仏教の仏道修行の行程。―　自然の摂理
　従果向因・・・如来が教化引導するために因位に出現すること。
　　―　原理・道理の表現。

「行」が従果向因である根拠。―　「大行あり、大信あり」における願文
17 願・18 願の順次性。（十方諸仏から十方衆生へ）

「名を称する」ことが「行」であることの立証。

『教行信証』学習会５回目レジメ　　２０２０年　９月２９　日

**学習形態　　総論的に講義。のち各論的座談。**
**テーマ　　『教行信証』とは何か。**
**―　『教行信証』撰述の意図　―**

『信巻』について

問１　表題に「信」が入れていないのはなぜか。

表題は、「顯淨土」の教行証である、と考えると、「信」は顕淨土ではない、という意味を示しているのか。とするならば、何を顕そうとする「信巻」なのか。これに別序が置かれていることからも、他とは異質であることを暗示しているようにも見える。

しかしながら標挙には「顕淨土真実信」と述べられている。

問２　「悉知義の文」をどう見るか。

底本では表に標挙の文その裏に悉知義の文が書かれているが、清書本［西本願寺本・高田本］には書かれていない。したがって、メモ書き程度に捉えられていたのだろう。しかし、それでいいのか。

問３　第１８願文に「唯除」があるが、その成就文にもある。その意味は何か。

そして、「信楽釈」の願成就文は、「乃至一念せん」までで、「欲生心」の成就文は「至心回向したまえり」以降、唯除の文の最後まで示されている。「至心」の願成就文はない。これをどう読むか。

問４『信巻』は何故完結しないまま（御自釈がないまま）で終わっているのか。

この部分は難化の機、難治の機・病が説かれる『大経』・『観経』・『涅槃経』を示して、「これらの真教、いかんが思量せんや」という文言から始まっていく。我々の思量は生涯続くのである、ということを示しているのか。

課題 13　『信巻』がなぜ序文を持つ「独立形式」になっているのか、その意味と意義を考える。

『信巻』に序文があるということは、新たな文章が始まることを意味する。ということはこの『信巻』が二重の意味を持っていることを暗示させてるのではないか、と考える。

『信巻』が開かれる三つの事柄

一、　如来（法蔵菩薩）が「唯除」を発見したこと。

二、　曇鸞大師（鸞菩薩）が「称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざる」ことを自ら実感されてこと。

三、　親鸞が（現実の中に）「愁悩する人一人もなし」ということに悲嘆したこと。

参考）『教巻』の最初に「浄土真宗に往相、還相の二種あり」と述べられているが、何故還相回向があるのか。内容的に教行信証と展開していけば、無上涅槃に至ってそれで十分ではないか、とも思える。還相回向は教化地の利益である、と言われるが、それならば、最初に「・・・あり」と断言するのもおかしいではないか。

課題 14　『別序』を読む。（『別序』と『総序』の相対を念頭にして）

一、「夫れ以みれば」と「竊かに以みれば」の心情の相違をめぐらす。

二、「末代の道俗・近世の宗師・・・」と「王舎城の物語」の時代とその意味。

三、「毀謗を生ずる」と「疑網に覆蔽せられる」との相違。

四、「標挙の文」の意味するところ。

課題 15　『観経』三心から、何故に『大経』三信が呼び起こされてくるのか。

課題 16　『大経』の三信と天親の「一心」と相対させる意図はどこにあるのか。